1　研究主題

民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力を育む社会科の探求
～子どもの素朴知の変容を促す授業デザインの工夫～

2　主題設定の理由

（1）研究主題設定の経緯

①なぜ「民主的な国家・社会の形成者」を掲げるのか

世界の情勢を見ると，保護貿易主義や自国第一主義など排他的な風潮が広まり，社会の分断が起こっている。この解決には，民主的な対話を重ねて打開策を見出していかなければならない。「民主主義の危機」が叫ばれている現代において，もう一度民主主義を見つめ直し，私たち社会科教師が原点にかえって研究を進めるために，研究主題に掲げることにした。

②社会科と民主的な国家・社会の形成者を育てること

我々教師の使命は「民主的な国家・社会の形成者」を育てることである。なぜなら，教育基本法や社会科の学習指導要領において，「民主的な国家・社会の形成者」が教育の目的や社会科の目標として掲げられているからである。つまり，子どもたちが社会科を学ぶ目的は「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者」となるためであるといえる。そもそも，戦後発足した社会科は，民主主義社会の形成とその主体（市民）の育成を重視してつくられた。民主主義を見つめ直し，「資質・能力」の育成が求められる昨今だからこそ，子どもたちが「なぜ社会科を学ぶのか」という目的意識に立ち返って研究主題を設定した。

（2）民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力とは何か

本研究会では，熊本大学教育学部教授の藤瀬泰司氏が提唱している「民主主義の担い手の育成」を参考に，社会科において育むべき資質・能力を「民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力」とし，具体的には次のようにとらえる。

> よりよい社会を作り出すために，社会の問題に気付き，多様な他者と共に社会問題の解決に向かう態度および公正に判断する力

自分が生きている社会の問題を考えるとき，自分の生活とのかかわりや利害などを踏まえて意思決定するだけでなく，同じ社会に生きる多様な立場の人々にも目を向けることが民主的であることは言うまでもない。子どもたちが民主的な国家・社会の形成者になるには，自分が良いと思う解決策や行動が，他者の生活や利害にどのような影響を及ぼすかについても考えさせていくことが大切である。さらに歴史を踏まえ，世代を超えた他者の立場を考慮し，よりよい社会をつくろうとする姿勢や態度も含めた社会問題の民主的な解決を図ろうとする資質・能力こそが，「民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力」であると考える。[1)]

（3）副題との関係

「民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力を育む」ためには，子どもの素朴知の変容を促す必要がある。ここでいう素朴知とは，素朴理論や素朴概念，固定観念や先入観などのことである。藤瀬氏は，「子どもは，日常生活の中で素

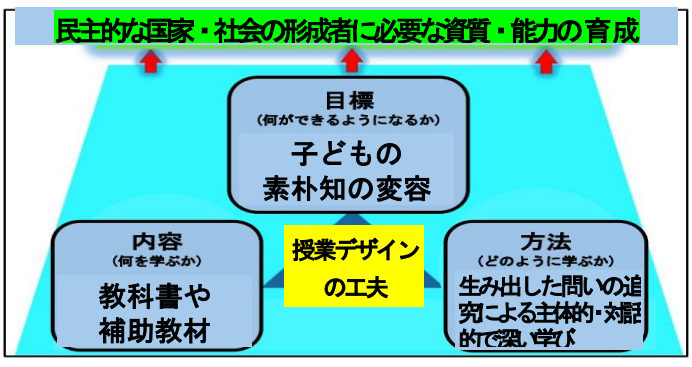

図１　本研究の視点

朴知を生産して既存の国家・社会の現実を認識したり形成したりしている。そのため，社会科授業では，子どもが生産する素朴知の実態を把握し，その変容を促す必要がある」と述べている。また，同氏は，「民主的な国家・社会の形成者を育成するには，子どもを知識の生産者とみなす構成主義の学習観に基づいて授業をつくる必要がある」とも述べている。つまり，民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力を育むためには，学びの主体者である子どもが授業を通して素朴知をどのように転換し，どのような知識を構成したり形成したりしたか，その変容をみとることが重要である。

そこで，本研究会では，**図１**で示すように「民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力を育む」ために，授業研究や授業構想を「目標・内容・方法」という関係の中で考える[2)]。これら３つを各単元の学習でどのように設定するのか，授業デザインの工夫が我々教師に求められる。

① 研究の目標

本研究会の目的は,「民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力を育成する社会科の授業づくり」であり,「授業を通して子どもの姿を変えていく」ことである。したがって，この目的を達成するために，子どもが「何ができるようになるか」の目標は,「子どもの素朴知の変容」と設定する。この目標は，個々の授業を通して変わった単元終了時の子どもの姿，つまり素朴知が変容した子どもの姿である。ゆえに，目的を常に見据えながら，教材に応じた目標の設定が必要である。

② 研究の内容

次に，何を学ぶのか，内容を設定する必要がある。本研究の内容は,「民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力を育成するために，子どもたちが意欲的に学んでいくための教材」である。目標である「子どもの素朴知の変容」を達成するには，子どもが授業を通して社会的事象に対する新たな考えをもち，あるいは解釈を広げていく必要がある。教材として教科書の記述や資料を扱うだけでは，子どもの素朴知の変容を促すことは難しい場合が多い。そのため，教科書の補助教材を発掘・開発し，それを扱うことによって，単元の学習内容を構成すべきである。

③ 研究の方法

最後に，どのように学ぶのか，方法を設定する必要がある。目標の「子どもの素朴知の変容」を達成するためには，単元の学習で子どもに「問い」を生み出させ，追究させる必要がある。なぜなら，子どもを知識の生産者とみなすのであれば，自ら生み出した「問い」の追究による主体的・対話的で深い学びが，素朴知の変容をよりよく促すと考えるからである。子どもの素朴知は，事前アンケート等の記述だけでなく授業中の発言や話し合いの中でも捉えることができる。これまでの県大会等の実践により，それらの素朴知を授業で取り上げ，素朴知だけでは説明できない限界（ギャップ）に気付いた時に，生徒の「問い」が生じることがわかってきた。子どもの生み出した「問い」を追究する，素朴知では解決できない学習課題を設定することによって，より主体的・対話的で深い学びが可能になると考える。

３　研究の進め方

研究主題を達成するために，**図２**に示す授業デザインの工夫よって研究を進めることにした。

（１）素朴知の推測と目標の設定

第１段階は，子どもの素朴知を推測して，変容したい子どもの姿である単元の学習目標を設定することである。扱う予定の単元の学習に関して，子どもが日常生活やこれまでの学習等でどのような素朴知を形成し

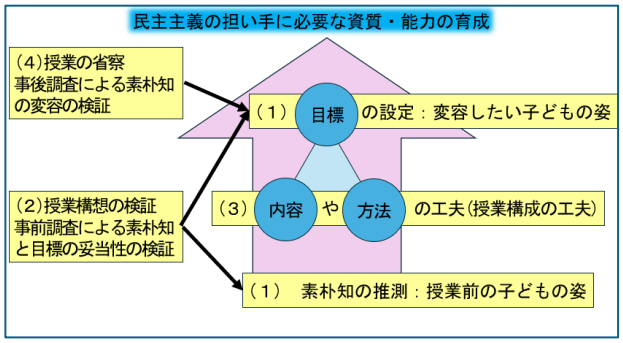

図２　子どもの素朴知の変容を促す授業デザインの工夫

ているのかを推測する。その推測にもとづき，単元の学習によって育てたいよりよい社会をつくろうとする姿勢や態度も含めた社会問題の民主的な解決を図ろうとする資質・能力を踏まえながら，変容後の子どもの姿である単元の学習目標を設定する。

（2）授業構想の検証

第２段階は，単元の学習に関する事前調査を行って，授業構想の検証を行うことである。この段階では，（1）において推測した素朴知及び，設定した単元の学習目標の妥当性を検証する。単元の学習をよりよく構想するには，子どもの素朴知を正しく捉え，変容後の目標を的確に設定することが重要である。そのため，事前調査によって，子どもの実態の把握を正確に行い，教師側が推測した素朴知と実際の子どもの素朴知にズレがないかどうかを検証し，必要に応じて単元の学習目標を修正する必要がある。

（3）授業構成の工夫

第３段階は授業構成を工夫することである。具体的には，子どもの素朴知の変容をよりよく促すという目標の達成に向けて，教科書の補助教材を発掘・開発・実施するという授業内容の工夫と，子どもに社会的な見方・考え方を働かせる「問い」を生み出させ，追究させる授業方法の工夫の２つを行う。

① 内容の工夫―教科書の補助教材の発掘・開発・実施―

子どもの素朴知の変容をよりよく促すには，教科書の補助教材の発掘・開発・実施が必要である。なぜなら，授業を通して社会的事象に対する新たな考えをもち，解釈を広げさせるには，教科書の記述や資料を扱うだけでは難しいからである。そのため，単元を構想していく段階で，教科書の記述や資料等によって到達できる知識や概念を見極め，目標の達成に必要な補助教材を探さなければならない。

② 方法の工夫―生み出した「問い」の追究による主体的・対話的で深い学び―

子どもの素朴知の変容をよりよく促すには，子どもの生み出した「問い」を追究させることによって主体的・対話的で深い学びを実現させる必要がある。素朴知の限界に気づかせることよって生じた「問い」の一つ一つを解決していくことが，新たな知識や概念を主体的に獲得していくことにつながると考える。子どもに生み出させた「問い」にもとづいて，素朴知では解決できない学習課題を設定すれば，より主体的・対話的で深い学びが可能になると考える。

1） 子どもに「問い」を生み出す方法

表３は，「問い」の類型と教師の工夫の例を示している。教師が，社会的事象や学習内容を比較させたり，関連付けたりすることで，子どもに「問い」を生み出すことが可能になると考える。

問いを生み出す手段・方法	時間	教師の工夫	留意事項
①学習内容に対する既有知識とのズレ・ギャップ・意外性から生まれる「問い」	単元や各時の導入・展開部	事前アンケート等で子どもの既有知識を把握し，ズレやギャップ・意外性を生む教材の準備をする。	そのまま学習課題や単元を貫く課題になる場合もある。
②調べる中での矛盾に対する「問い」や異なる立場・視点に対する疑問などの「問い」	単元や各時の導入・展開部	学習課題や調べ学習の中で，自分の予想に反することに気づかせたり，異なる立場や視点に目を向けさせたりする。	議論型の授業や，ジグソー学習等で有効である。
③単元や授業間での学びを比較・関連させた結果から生じる法則・理論や特色・解釈の相違に関する「問い」	単元や各時の導入・展開・終結部	本単元や本授業で学んだ法則・理論や特色・解釈を，これまでの単元や授業で習得していたものと比較・関連させ，違ったり当てはまらなかったりすることに気づかせる。	新たに学んだ法則・理論や特色・解釈が吟味され，子どもの理解がより深まる。
④学習内容を習得した結果，新たに思った疑問や解決すべき課題に関する「問い」	単元や各時の終結部	学習内容を振り返る中で，さらに調べるべきことや疑問を出させる	次時の学習や次の単元につなげる。

表３　「問い」の類型と教師の工夫の例

2） 子どもの生み出す「問い」と社会認識の階層

社会科の授業における子どもの生み出す「問い」は，社会的な見方・考え方を働かせる「問い」であることが重要である。社会的な見方・考え方を働かせる「問い」とは，社会的な見方・考え方を働かせる学習課題につながる「問い」であるといえよう。見方・考え方を働かせて学ぶことにより，子どもたちは社会科で獲得すべき知識（概念）を得て，それが新たな，より鍛えられた視点（活用する概念）として成長する。[3] また、この過程を繰り返すことによって，より高次の社会認識を獲得していくと考えられる。**図４**は，社会科における社会認識の階層を示したものである。また，社会認識の階層ごとに各分野における見方・考え方と学習課題の例をまとめたものが，**表５**である。

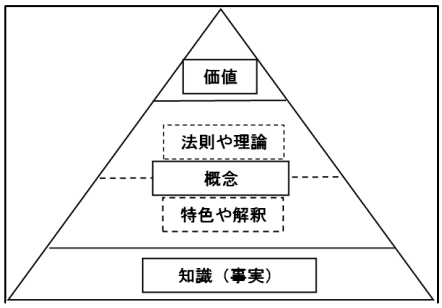

図４　社会認識の構造図 [4]

分野	社会認識の階層	見方（追究の視点）	考え方（追究方法）	問いの例
地理	価値	○持続可能性など ※以下の５つの視点を踏まえて	構想	○どのような地域になるべきか
	概念（法則や理論，特色や解釈）	○地域 （一般的共通性，地方的特殊性）	考察	○その地域はどのような特徴があるのか，この地域と他の地域ではどこが異なるのか，なぜそうなったのか
		○空間的相互依存作用 （関係性，相互性） ○人間と自然の相互依存関係 （環境依存性，伝統的，改変，保全）		○そこは，それ以外の場所とどのような関係をもっているのか，なぜそのような結びつきをしているのか ○そこでの生活は，周囲の自然環境からどのような影響を受けているか，周囲の自然環境にどのような影響を与えているのか
	知識（事実）	○位置や分布（絶対的，相対的，規則性，傾向性，地域差） ○場所（自然的，社会的）		○それはどこに位置するか，分布するか ○それはどのような場所なのか
歴史	価値	○持続可能性など ※以下の４つの視点を踏まえて	構想	○歴史を振り返り，よりよい未来の創造のために，どのようなことが必要とされるのか
	概念（法則や理論，特色や解釈）	○事象相互の関連に関わる視点 （背景，原因，結果，影響など）	考察	○どのような影響を及ぼしたのか　なぜそのような判断をしたと考えられるのか　なぜおこったのか（何のためにおこなわれたのか）
		○諸事象の特色に関わる視点 （相違，共通性，時代の特色など） ○諸事象の推移や変化に関わる視点 （変化，発展，時代の転換など）		○どのような時代だったのか ○前の時代とどのように変わったのか
	知識（事実）	○年代の基本にかかわる視点 （時期，年代，時代区分など）		○いつ（どこで，誰によって）おこったか
公民	価値	○社会に見られる課題の解決を構想する視点 （対立と合意，効率と公正，民主主義，自由・権利と責任・義務，財源の確保と配分，利便性と安全性，国際協調，持続可能性など）	構想	○よりよい決定の仕方とはどのようなものか　社会保障とその財源の確保の問題をどのように解決していったらよいか　世界平和と人類の福祉の増大のためにどのようなことができるのか　地球上に存在する課題の解決に向けて，今後どのようなことができるのか
	概念（法則や理論，特色や解釈）	○現代社会を捉える視点 （対立と合意，効率と公正，個人の尊重，自由，平等，選択，配分，法的安定性，多様性など）	考察	○なぜきまりがつくられるのか　私たちにとってきまりとは何か　なぜ市場経済という仕組みがあるのか　市場経済にはどのような機能があるのか　なぜ法に基づいて政治が行われることが大切なのか
	知識（事実）			○日本国憲法の３つの基本原理はなにか 人間らしく豊かに生きる権利のことを何というか

表５　社会認識の階層別の見方・考え方及び問いの例 [5] [6]

※考察…社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考察する力

※構想…社会に見られる課題について，社会へのかかわり方を選択・判断する力

授業前の子どもの素朴知は，低次元のものや一面的な視点から見た社会認識であることが多い。授業を行う際は，子どもがどの段階の素朴知を獲得していて，最終的にどのような知識を獲得させるのかを踏まえて，各分野における見方・考え方を働かせる学習課題を設定しなければならない。それによって，子どもからどのような「問い」を生み出したいかも定まってくる。子どもは，様々な見方・考え方を働かせながら学習活動に取り組むことで，個別的知識から概念的知識，価値的知識を獲得・形成し，社会認識を深めることができる。そして，子どもの社会認識を，個別的知識からより高次の段階の価値的知識まで到達させることで，子どもの素朴知の変容をよりよく促し，民主的な国家・社会の形成者に必要な資質・能力が育まれると考える。

（4）授業の省察

第４段階は，単元の学習に関する事後調査を行って，授業を省察することである。この段階では，学習後に子どもの素朴知の変容が見られたかについて検証することを目的とする。事後調査では，事前調査と同じ内容のアンケート項目を用いることで，学習の前後における子どもの変容をよりよく見取ることができる。また，集計の際は，量的変化と質的変化の両面から検証を図る必要がある。そのため，アンケートによる回答数の変化に着目するだけでなく，各個人の回答の変容にも着目し，変容した理由についても把握することが重要である。

４　研究の進め方の例

ここでは，令和４年度の九州中学校社会科教育研究大会熊本大会における公民的分野の授業実践「消費生活と市場経済」を具体的な例として紹介する。この授業実践は，エシカル消費を教科書の補助教材として扱うことによって，「消費の第一の基準は安さであること」や「家計は政府や企業に左右される受動的な経済主体」という子どもの素朴知の変容を促す経済学習であった。

（１）素朴知の推測と目標の設定

「消費生活と市場経済」の消費に関して，授業者は「限りある収入の中で消費生活を行うためには，消費の第一の基準は安さであること」や「地域や人・社会，環境に配慮しない消費を行うことで，家計は政府や企業に左右される受動的な経済主体である」という素朴知を形成しているのではないかと推測した。この素朴知を変容させる単元の学習目標を，「現在の消費社会で起きている地域や人・社会，環境の問題を解決し，持続可能な社会の形成に参画しようとする」と設定した。この単元の学習目標が達成できれば，自分の消費行動が社会に影響を及ぼし，エシカル消費の実施が地球環境等への配慮になることを子どもに把握させられるため，持続可能な社会の形成に参画していく子どもの育成，つまり「民主的な国家・社会の形成者」の育成につながると考えた。

（２）授業構想の検証

次に，授業者は（１）において推測した素朴知及び，設定した単元の学習目標の妥当性を検証した。事前・事後調査の結果を，次頁の**図６**に示す。事前・事後調査では，９つの基準によるダイヤモンドランキングを行った。事前調査の結果より，①の値段・価格を上位にしていることや，④の生産者の労働状況，⑤の地元や被災地の商品，⑦のエコやリサイクル商品を下位にしている子どもが多いことから，安さを求めて消費生活を行うという素朴知を形成していることが分かった。さらに，サーキュラーエコノミー型の社会の実現に向けて最も努力すべき経済主体はどれかを問う授業前のアンケートでは，家計が 13 人，企業が 4 人，政府が 21 人となり，クラスの約３分の２の子どもが「家計は，政府や企業に左右される受動的な経済主体である」という素朴知を形成していることが分かった。よって，事前調査の結果，（１）で推測した素

朴知は，授業者が予想した通りであることが分かった。

（３）授業構成の工夫

①内容の工夫

（２）で確定した素朴知の変容をよりよく促すには，どんな教科書の補助教材が必要かを考察するため，授業者は東京書籍の公民的分野の教科書（令和３年度発行）を分析した。関連する記述を以下に示す。

> (P131) 貯蓄は将来の支出への備えになるため，限られた収入を，消費と貯蓄にどのように配分して，有効に活用するかが重要です。（中略）私たちが欲しいものやしたいことはたくさんありますが，収入や時間は限られているため，一定の収入や時間の中で，必要な商品を選択しなければなりません。
> (P135) また，私たちは消費生活の中で資源やエネルギーを使い，廃棄物を出していることを自覚し，資源の節約や，環境への配慮を心がける責任もあります。

上記の記述から，子どもの「安さを求めて消費生活を行う」という素朴知が維持・強化されてしまうと考えた。また，資源の節約や環境への配慮などの消費行動の具体的な実践方法が明瞭ではないことや，そのような消費行動に移行しなければならない根拠や動機が不明確であることによって，地域や人・社会，環境に配慮するエシカル消費を積極的に行うようにはならないと考えた。この問題点を克服するため，教科書の補助教材として「エシカル消費」や欧州で導入が進む「サーキュラーエコノミー」について扱い，持続可能な社会の実現に向けた消費の在り方について理解させようとした。

②方法の工夫

この授業実践で生み出した「問い」やその工夫については，**表３**の主に②の問いを活用しながら授業を展開した。その詳細については，紙面の都合上，本研究会が発行した令和６年度の『研究紀要』P20～P25 に掲載されているものを参照願いたい。

（４）授業の省察

子どもの素朴知に変容が見られるかどうかを検証するために，下記のような事後調査を行った。

＜事前調査＞

ダイヤモンドランキング分析表（授業前）

	最上位	上位2・3位	上位計	下位2・3位	最下位	下位計
①値段・価格	16	9	25	1	1	2
②機能性・性能の高さ	9	16	25	0	0	0
③安全性	2	13	15	0	0	0
④生産者の労働状況	0	0	0	17	10	27
⑤地元や被災地の商品	0	0	0	14	8	22
⑥評判の良さ(広告やCM含む)	1	13	14	2	1	3
⑦エコやリサイクル商品	0	0	0	12	3	15
⑧最新性・独自性	1	3	4	2	2	4
⑨自分の将来への影響	0	4	4	10	4	14

＜事後調査＞

ダイヤモンドランキング分析表（授業後）

	最上位	上位2・3位	上位計	下位2・3位	最下位	下位計
①値段・価格	2	10	12	10	1	11
②機能性・性能の高さ	3	3	6	13	1	14
③安全性	5	12	17	0	1	1
④生産者の労働状況	0	10	10	8	3	11
⑤地元や被災地の商品	0	16	16	4	2	6
⑥評判の良さ(広告やCM含む)	0	3	3	17	5	22
⑦エコやリサイクル商品	23	11	34	1	0	1
⑧最新性・独自性	0	0	0	14	20	34
⑨自分の将来への影響	6	10	16	6	5	11

〔３年１組の子ども別の変容〕（３名のみ抜粋）

子ども	事前調査の上位	事後調査の上位	事後調査の上位を選んだ理由
A	① ⑥　②	⑦ ⑤　④	地球温暖化などへの危機感を感じ，エコやリサイクルが重要だと感じたから。
B	① ②　③	⑦ ③　⑤	値段だけで選ぶと，無駄遣いや廃棄物を多く出すきっかけになるため，エコやリサイクル商品を意識して購入して，地球温暖化による気温上昇や作物の減少に貢献したいと思った。
C	① ②　③	⑦ ⑤　①	日本が地球温暖化などに悪影響を及ぼしていることから，環境に配慮したものを買うべきだと思った。

図６　授業実践「消費生活と市場経済」の事前・事後調査（一部抜粋）

事前・事後調査のダイヤモンドランキングを比較すると，事前調査において多かった①が事後調査では減少し，⑦が大きく増加していることが分かる（量的変化）。子ども別の変容をみると，①を最上位にしていた子どもが，地球温暖化等の環境問題による影響に危機感を持ったことで，⑦を最上位にしたことがわかった（質的変化）。クラス全体にもこのような傾向が見られたことから，この授業実践により安さを消費の第一の基準にしていた子どもの多くが，エシカル消費を積極的に実施しようと変容していることが分かった。また，サーキュラーエコノミー型の社会の実現に向けて最も努力すべき経済主体はどれかを問う授業後のアンケートでは， 38 人全員が家計と答えていた。

以上のことから，事後調査の結果から環境問題を深刻に捉えたことによってエシカル消費を積極的に実施しようとする「政府や企業を動かす能動的な経済主体である」という家計観に転換したことが分かる。このように，授業の省察では，単元の学習の前後で同じ内容のアンケート等を実施し，回答数だけでなく，その理由まで着目することで，子どもの素朴知の変容を量的・質的の両面から見取ることができる。

注】

1）藤瀬泰司「社会科授業研究における視点の構造転換–民主的な学校作りに寄与することをめざして」熊本大学教育学部藤瀬研究室特別講座，2016 年

2）藤瀬泰司『教科書（教材）「を」教える授業と教科書（教材）「で」教える授業は，何がどう違うのか？』熊本市社会科教育研究会主催　授業づくり研修会資料，2022 年

3）澤井陽介・中田正弘・加藤寿朗・宗實直樹著『「これからの社会科教育はどうあるべきか』東洋館出版社，2023 年

4）岡崎誠司『社会科の授業改善１　見方考え方を成長させる社会科授業の創造』風間書房，2013 年

5）澤井陽介・加藤寿朗『見方・考え方【社会科編】「見方・考え方」を働かせる真の授業の姿とは』東洋館出版社，2017 年

6）中央教育審議会「社会科、地理歴史科、公民科ワーキンググループ資料」，2016 年

参考文献・資料

・澤井陽介・唐木清志『小中社会科の授業づくり　社会科教師はどう学ぶか』東洋館出版社，2021 年

・宇野重規『民主主義とは何か』講談社，2020 年

・宇野重規『自分で始めた人たち–社会を変える新しい民主主義』大和書房，2022 年

・北海道社会科教育連盟・澤井陽介『「～のはずなのに，なぜ？」を教材化する社会科学習』東洋館出版社，2022 年

・藤瀬泰司「子どもの素朴知の変容を促す社会科授業づくり」『社会科教育』第 781 号，明治図書(2024)，pp. 122–125